

# 「匂ふ兵部卿・薫る中將」考

金秀姫\*

---

## 目次

---

- I. はじめに
  - II. 上代文學における「にほふ」と「かをる」
  - III. 『源氏物語』における「にほふ」と「かをる」
  - IV. おわりに
- 

## I. はじめに

光源氏没後の世界を語り始める匂宮三帖には、新しい主人公として登場する薫と匂宮との對照的な設定が隨所に見られる。その端的な一例として、二人の芳香の問題が擧げられよう。

香のかうばしきぞ、この世の匂ひならず、あやしきまで、うちふるまひたまへるあたり、遠く隔たるほどの追風も、まことに百歩の外も薫りぬべき心地しける。(・・中略・・)かく、あやしきまで人の咎むる香にしみたまへるを、兵部卿宮なん他事よりもいどましく思して、それは、わざとよろづのすぐれたるうつしをしめたまひ、朝夕のことわざに合はせいとなみ、御前の前裁にも、春は梅の花園をながめたまひ、秋は世の人のめづる女郎花、小牡鹿の妻にすめる萩の露にもをさをさ御心移したまはず、老を忘るる菊に、おとろへゆく藤袴、ものげなきわれもかうなどは、いとすさまじき露枯れのころほひまで思し棄てずなどわざとめきて、香にめづる思ひをなん立てて好まじうおはしける。(・・中略・・)例の、世人は、匂ふ兵部卿、薫る中將と聞きにくく言ひつづけて、そのころよきむすめおはするやうごとなき所どころは、心ときめきに聞こえごちなどしたまふもあれば、宮は、さまざまに、をかしうもありぬべきわたりをばのたまひ寄りて、人の御けはひありさまをも氣色とりたまふ<sup>1)</sup>。(匂宮⑤二六～二八)

---

\* 高麗大學校 日本學研究センター 研究員 日本古典文學

1) 『源氏物語』の引用は、新編日本古典文學全集『源氏物語①～⑥』(小學館)の本文により、その卷數と頁數を示す。

天性の体香を備えたと紹介される薫が、それに挑み、人工の「香」で對抗する匂宮とともに、「匂ふ兵部卿・薫る中將」(匂宮⑤二八)と称えられているのである。このような両者の併称は、天性的・人工的という相違があるにせよ、いずれもその芳香のすばらしさゆえに他ならないが、それにしても、両者の芳香の違いをどうして「にほふ」と「かをる」という言葉によって象徴しているのか。ちなみに、このような併称は、「匂ふや薫るや」(竹河⑤一〇六)という形で再び言及されているし、特に薫に関しては同じく竹河巻に「この薫中將は」(竹河⑤一〇七)と見える点から、作者の命名の一つであったことが知られる。既に「にほふ」と「かをる」の象徴性について様々な指摘があり、「匂ふ兵部卿・薫る中將」と併称される二人がこの言葉のニュアンスをよく体現しているという見解が殆んどである<sup>2)</sup>。

しかし、「匂ふ兵部卿・薫る中將」が、それなりに両者の對立的な性格を象徴しているとしても、そのような對立的な性格が實際の物語の展開においても、そのまま一貫するのであろうか。そもそも「匂ふ兵部卿・薫る中將」というのは、光源氏の死を「光」の消滅と捉え、その闇の世界に漂う芳香を意識してこそこの呼称であるか<sup>3)</sup>、純粹に嗅覺的な意味として用いられる「かうばし」などに對し、いわゆる視覺的な用法を合わせ持っていることに共通点がある。従って、本稿では、それらの意味も参考にしながら、改めて二つの呼称の問題について考えてみたいのであるが、それにふれる前に、もう少し広い視野から、『源氏物語』以前の二つの言葉のありようについて検討してみることにする。

## Ⅱ. 上代文學における「にほふ」と「かをる」

『万葉集』にはやや特殊な用例も含めて約七六例の「にほふ」の用例が見られるが、用字の面で顯著なのは、正訓字で表記された用例が八例に過ぎず、殆んどが「仁保布」「丹穗日」などのかたちで、一字一音の仮名表記になっていることである。

勿論、一首全体が一字一音になっている用例、あるいはこれに準ずる形になっている用例が、卷十四、十五、十七、十八、二十を中心に約二十例見られるが、これらの場合は、そもそも、それらが収められている巻の万葉仮名表記の問題とも関わっているので、「にほふ」の仮名表記自体に特に意味があるとは言えない。しかし、問題は、例えば「妹が袖卷來の山の朝露ににほふ黄葉の散らまく惜しも(妹之袖卷來乃山之朝露爾仁寶布黄葉之散卷惜裳<sup>4)</sup>)」(十・二一

2) 藤田加代氏(『「にほふ」と「かをる」』風間書房、一九八〇)は、「にほふ」は「對象に内在する美質が強く發散し、その明るく華麗な雰囲気あたり一面に廣がる」言葉であったのに對して、「かをる」は「ある空間にこもり漂いながら美的雰囲気をつくる」言葉と規定し、「宇治の物語の男性主要人物二人は、その通称に粹つけた造型だ」と指摘している。p.41

3) 小西甚一「源氏物語のイメージリ」(『解釋と鑑賞』一九六五・六、日本文學研究資料叢書『源氏物語Ⅰ』所収) p.218

八七・作者未詳)のように、一首全体、ひいては巻全体が、正訓字主体表記の場合でも、あえて「にほふ」だけは仮名表記にしている例が多いことである。具体的な数字で示すと、「にほふ」の約七六例の中で約四八例がこのようなパターンで、「にほふ」の表記の典型的な形であると言える。

なお、正訓字で表記された僅かな用例の場合、宛てられた漢語は「薫」(三二八・九七一)「香」(四四三・三三〇五)「艶」「艶色」(一八五九・一八七二)「染」(二一七九・二一九二)などであるが、「あをによし寧樂の京師は咲く花の薫ふがごとく今盛りなり(青丹吉 寧樂乃京師者 咲花乃 薫如 今盛有)」(三・三二八・小野老)など、全てが正訓字主体表記の歌に用いられている。逆の場合、すなわち、仮名表記を基本とする歌の中で、「にほふ」だけは漢字で意味を表すような用例は一例も見られないのである。従って、「にほふ」の漢字表記はきわめて消極的なもので、最小限に抑制されていると言わざるを得ないのである。

以上のように、「にほふ」の用字から窺える様々な特徴から、『万葉集』における「にほふ」は安易に漢語で表記することの困難な語で早く柴生田稔氏が指摘したように、「本来の國語であり、また端的にその意味を示しにくい様々の色調を持つた語<sup>5)</sup>」と思われる。というのも、表記法のみならず、意味に關しても一概には言えない点が多く見られるからである。

『万葉集』における「にほふ」の意味は、宣長が「玉勝間」の中で「にほひとおほくよめるは、みな色のにほひにて、鼻にかゝるゝ香にはあらず」と述べたように、主としていわゆる視覚的な表現であったことが廣く知られている。實際、『万葉集』の「にほふ」には、女性や青年の美しさ、紅葉や衣の色が鮮やかに映發している状態などを視覚的な映像として捉えたものが多く、殆んどの場合、様々な色合いを含めている。特に、しばしば見られる「紅にほふ」という表現を挙げるまでもなく、赤系統との關連性が著しく窺える。『大言海』が「丹穗ヲ活用シタル語ニテ、赤キニ就キテ云フ」とし、その他の辭書や注釋もおおむね同様の解釋を施しているように、「丹穗」(十二例)「丹」(二例)「丹保」(二例)「丹覆」(一例)など、「丹」に關連した表記が比較的多く見られるからである。その他に白色(白妙・眞砂・白ツツジ・白梅・卯の花・馬酔木)など、「赤」の系列より逸脱した色についても「にほふ」とする用例もあるが<sup>6)</sup>、殆んどの場合、「紅」や「赤」が中心で、「にほふ」は非常に色彩感に富む華やかな言葉と考えられる。

4) 『万葉集』の歌番号と引用は中西進『万葉集全譯注原文付』(講談社文庫)による

5) 柴生田稔「かをる」と「にほふ」(『國語と國文學』一九五九・三) p.7

6) 眞砂、白ツツジ、白梅などの白色に用いられた「にほふ」は「色が鮮やかに(美しく)映發する」という意味で用いられたと思われる。ちなみに、佐竹昭廣氏は、古代人の色に對する意識を「光」をキーワードにして捉え、「アカ《明》、クロ《暗》、シロ《顯》、アヲ《漠》は、色に關する用例なのではなく、實は、「明一暗」「顯一漠」という二系列の用語で、それが色を表すために轉用されたものである。…(中略)色はその光から徐々に出現するまでである。生理學的にも、心理學的にも、光の感覺の色の感覺に對する優位は動かないようである」と説いている(佐竹昭廣『古代日本語における色名の性格』『萬葉集拔書』岩波書店、p.99)。古代人が色を「明(あか)一暗(くろ)」「顯(しろ)一漠(あを)」という光の感覺として捉えていたとすると、「明(あか)」「顯(しろ)」の方が「にほふ」の語感に近いと言えよう。

これと関連して「にほふ」は生命感溢れる表現でもあった。端的な例として「にほふ」主体が花である場合、「秋づけば 萩咲きにほふ」(十九・四一五四・家持)「霍公鳥 來鳴く五月に 咲きにほふ」(十九・四一六九・家持)のように、「咲く」ことと深く関わり、しかも用例の多くは、「咲く花のにほふがごとく今盛りなり」(三・三二八・小野老)「春の花今は盛りににほふらむ」(十七・三九六五・家持)などのように、花なら花の「今」を、その「盛り」の一瞬として捉えている<sup>7)</sup>。花のみならず、人間に對しても、「紅にほふ少女らし」(十七・四〇二一・家持)「石竹花が花見ごとに少女らが笑まひのにほひ」(十八・四一一四・家持)など、「にほふ」を通して若盛りの生命力を端的に表している例は枚擧にいとまがないほどである。「黄葉のにほひは繁し」(十・二一八八・作者未詳)「春花のにほえ榮えて秋の葉のにほひに照れる」(十九・四二一一・家持)「春の苑紅にほふ桃の花下照る道に出で立つ少女」(十九・四一三九・家持)など、「繁」「榮」「照」などの語と一緒に用いられたのも参考にすべきであろう。要するに、「にほふ」は、赤系統の色彩を含めた華やかさの中で、対象の「今」をその盛りの一瞬として捉える言葉なのである。

一方、「かをる」の方は、「にほふ」に比して用例が少なく、『万葉集』の中に仮名表記になっているのが一例あり、その他、『日本書紀』『日本靈異記』『神樂歌』などに若干の用例が見られる。

明日香の 清御原の宮に 天の下 知らしめしし やすみしし わご大君 高照らす 日の御子  
いかさまに 思ほしめせか 神風の 伊勢の國は 沖つ藻も 靡ける波に 潮氣のみ 香れる國に  
味ごり あやにともしき 高照らす 日の皇子

(万葉・二・一六二・持統天皇)

一書曰、伊奘諾尊與伊奘冉尊、共生大八洲國。然後、伊奘諾尊曰、我所生之國、唯有朝霧而、熏滿之哉 乃吹撥之氣、化爲神<sup>8)</sup>。

(一書に曰はく、伊奘諾尊と伊奘冉尊、共に大八洲國を生みたまふ。然して後に、伊奘諾尊の曰はく、「我が生める國、唯朝霧のみ有りて、熏り滿てるかな」とのたまひて、乃ち吹き撥ふ氣、神と化爲す。)

(『日本書紀上』神代紀上 第五段一書第六)

三年夏四月、沈水漂着於淡路嶋。其大一圍。嶋人不知沈水、以交薪燒於竈。其烟氣遠薰。則異以獻之。

(三年の夏四月に、沈水、淡路嶋に漂着れり。其の大きさ一圍。嶋人、沈水といふことを知らずして、薪に交てて竈に燒く。其の烟氣、遠く薰る。則ち異なりとして獻る。)

(『日本書紀下』推古元年)

7) 伊原昭「にほふ—大伴家持における」(『古代文學』第八号、一九六八・十二)p.19

8) 『日本書紀』の引用は、日本古典文學大系(岩波書店)による。

伊勢志摩の 海人の刀禰らが 焼く火の氣 おけおけ  
伊勢之末乃 安末乃止祢良加 多久保乃介 於介々々  
焼く火の氣 磯良か崎に 薫りあふ おけおけ<sup>9)</sup>  
太久保乃計 以曾良加左支仁 加保利安不 於介々々

(神樂・湯立歌・七五)

『万葉集』の一例は、伊勢の海を譽めた表現に見える「神風の 伊勢の國は 沖つ藻も 靡ける 波に 潮氣のみ 香れる國に」(二・一六二・持統天皇)の例で、ここの「香れる(香乎礼流)」は、殆ど注釋が指摘しているように、「潮氣の立ちこめている状態」を表しているのであろう。類似した用例に神代紀上の「我所生之國 唯有朝霧 而熏滿之哉」があり、「朝霧」がかすんで立ちこめることを「かをる」と表現している。なお、神樂歌の湯立の歌の中にも「焼く火の氣 磯良か崎に 薫りあふ」という表現が見られる。

以上のような例は、いずれも、「潮氣」や「朝霧」、「焼く火の氣」などの形容で、嗅覺的意味を積極的には認めたい用例である。

一方、『日本書紀』の推古紀には「三年夏四月、沈水漂着於淡路嶋。其大一圍。嶋人不知沈水、以交薪燒於竈。其烟氣遠薰。」という叙述があるが、ここの「かをる」は香木を焼いた烟氣の表現なので、香りを含めていたかも知れない。『新撰字鏡』などにも「淑郁」に「香氣之盛曰淑郁蘭馥弥多薰」(天治本)「香氣之盛曰淑郁加乎留」(淳和本)とあり、早くから「かをる」に芳香の意味が含まれていたことが知られている。ところで、類似した内容が『聖徳太子傳曆』や『扶桑略記』などにも見えるが、そこでは「淡路嶋」に漂着した香木で仏像を造り、それを吉野の比蘇寺に安置したところ、「時々放光」とされている。香料の普及が仏教の伝来と密接な関連があることを示す例である。

これと関連した話で、同じく仏教的色彩が濃厚な用例が『日本靈異記』の上巻五縁の「信敬三宝得現報縁」にも見られる。

卅三年乙酉冬十二月八日連公居住難破而忽卒之。屍有異香而馥馥矣。天皇勅之七日使留、永於彼忠。逕之三日乃蘇甦矣。

(三十三年乙酉の冬十二月八日、連の公難破に居住みて忽に卒りぬ。屍に異香有りて馥馥なり。天皇勅して七日留め使め、彼の忠を詠ハシム。逕ること三日乃ち蘇メ甦キタリ。)

(『日本靈異記』上巻第五 「信敬三宝得現報縁」)

熱烈な崇仏派で、三宝を尊重し、推古朝に聖徳太子の腹心の従者として仕えたときれる大部屋栖野古が、その功德によって、急死したと思われてから三日後蘇生する話である。『日本

9) 『神樂歌』の引用は、日本古典文學大系『古代歌謠論』(岩波書店)による

『靈異記』に約十五例見られる蘇生譚の一つであるが、地獄めぐりではなく浄土を表している点、なお、死期の屍の形容が見られる点など、他の蘇生譚の中で異彩を放っている。すなわち、死期の大部屋栖野古の屍が「屍有異香、而粉馥矣<sup>10)</sup>」と表現されているのである。興福寺本の訓釋には「粉馥」に對して「上音分下音服□□□乎礼利」とあり、破損の所があるが、『新撰字鏡』や『名義抄』などを参考に「粉馥(カヲ)レリ」と讀むのが通説である。ここで、靈異として説かれた屍の芳香は、同じく『日本靈異記』の蘇生譚に、生前の罪によって牛頭に生まれ変わった「田中真人廣虫女」の叙述、「吏甦還之 棺蓋自開 於是望棺而見 甚臭無此」(下・二六)とは對照的で、屋栖野古の屍の「かをる」は生前の功德によるものに他ならない。

ちなみに、平安初期の寫本と言われる『金剛般若經集驗記』の石山寺藏本には「遇惡風船破 氣氛黑暗」という文章があり、紙背に「氣」に對して「カヲレル」という注が施されている。「惡風に遇い、船が破られ、カヲレル(氣)氣、黒く暗し」という意味であろう。すると、この「カヲレル氣」は、空中に見える不氣味な氣配を示すようで、「遇惡風」という天候を前提に「黒く暗し」と表現されているわけであるが、それにしても「かをる」のイメージを考える手がかりの一つとして貴重な用例であると思われる。「かをる」は、色彩感の富む「にほふ」に比べてはるかに暗く、強いて言えば、モノクロームのイメージであろう。

「かをる」の語義は『大言海』が「氣折るノ轉、折るハ自動ニテ、疊はるノ意」とし、「烟・霧・火・香ナドノ氣、髣髴ニ立チタナヒク」と記述しているように、氣配の「氣」に近いものであると思われるが、しかし、それと同時に、既に触れた『新撰字鏡』の叙述や推古紀の用例からも窺えるように、「香」との関連も視野にいれるべきであろう。香の関連語に『万葉集』には「香」の例が三例、カグハシの例が六例あるが、「高松のこの峯も狭に笠立てて盈ち盛りたる秋の香のよさ」(十・二二三三・作者未詳)「見まく欲り思ひしなへに縋懸けかぐはし君を相見つるかも」(十八・四一二〇・家持)「香ぐはしき 親の御言」(十九・四一六九・家持)など、單なる嗅覺的な意味というより、上野理氏が指摘しているように、より精神的な芳香を表す用例が多いと思われる<sup>11)</sup>。

以上のように、「かをる」は、嗅覺的な表現にしても、視覺的な表現にしても、「にほふ」とは、やや趣を異にしている。要するに、「にほふ」が色彩感に富み、なおかつ、対象の「今」を、その「盛り」の一瞬として捉える生命感溢れる言葉であったのに對して、「かをる」の方は、色彩のないモノクロームなイメージで、精神的な面が強く、全体的に「今」の一瞬に止まらない表現になっている。『日本靈異記』の用例にしても、靈異として説かれた屍の「かをる」は、生前の功德、すなわち「過去」を響かせる表現で、「今」の一瞬に止まらない表現性を孕んでいる。

10) 『日本靈異記』の引用は、日本古典文學大系(岩波書店)による。

11) 上野理「花と香と歌」(『後拾遺集前後』笠間書院、一九七六)は上代の「か(香)」の用例の中で花の香が少なく、におうとは思えぬ榊・朝霧・火・泉などの、上代の人の信仰に關するものが多く見られる点から、上代における「か」とは單に嗅覺による知覺や評価の表象ではなく、あるものから發する精氣やけわいに近いものであると指摘し、精神的な香の問題を説いている。pp.39-40

従って、上代における「にほふ」と「かをる」の様々な意味から、両者の對偶性を考える上で、あえて図式化を試みるならば、その一つとして「今」と「過去」との對比をも視野に入れるべきであろうが、それは後述するように、『源氏物語』の表現とも深く関わっている。

### Ⅲ. 『源氏物語』における「にほふ」と「かをる」

『源氏物語』には「にほひ」(八四例)「にほふ」(四五例)「にほひやか」(一六例)、その他、「御にほひ」「にほひみつ」などの形態を含めて、約一八五例の「にほふ」が見られるが、膨大な用例の中には様々な用法が見られ、語義が多岐にわたっていることが窺える。例えば、明らかに嗅覺的な意味として用いられた約七六例を見ると、薫物や花の香りを表すものが殆んどであるが、中には「蒜」の匂いや衣の麩け焦げた匂いなど、必ずしもよい香りを意味しない場合もある。視覺的な用法の場合も事情は同じで、殆んどがある対象の美質を捉えているが、その他に末摘花の赤い鼻、染色技法、ひいては昇進を遂げていく薫の繁榮ぶりを「いとどにほひまさりたまふ」(椎本⑤一七八)と表現する場合もある。

一方、「かをる」の方は、「かをり」(一八例)「かをる」(一一例)「かをりみつ」(三例)「薫る中將」(二例)その他、「御かをり」「かをり出づ」などの形で『源氏物語』に約三九例見られるが、用例も少なく用法も限定されている。明らかに嗅覺的な用法の約二七例は、いずれも薫物や植物の芳香の意味合いで、その他の視覺的な表現の十二例も全て登場人物の容貌を形容している。要するに嗅覺的な意味にしても、視覺的な意味にしても、多様な意味合いの「にほふ」とは對照的なのである。

このような傾向はそれぞれの主体が花である場合からも端的に窺える。すなわち「にほふ」主体が花である場合、一般的な花の他に、櫻・朝顔・紅梅・梅・山吹・藤・菊・橘・紫苑など、様々な花が「にほふ」と語られ、その芳香とともに、視覺的な美しさを表しているが、「かをる」の方は、橘・藤・藤袴・櫛などが見えるのみで、しかも全て嗅覺的な用法である。

二つの言葉の表現性を考える手がかりとして、登場人物の形容に用いられた用例を中心に検討してみたい。「にほふ」の場合、「うち赤みたまへる顔のにほひ」(宿木⑤四〇七)「容貌も盛んにほひて」(若菜上④二四)などのように、「顔」「容貌」に関する用例が殆んどで、多くの場合、「盛りに」「若う」「笑み」などととも用いられる。その他にも「きらきらし」「あざやか」「はなやか」「光る」などの語が見られるが、端的な例として、幼兒の光源氏の抜群の美しさが「名高うおはする宮の御容貌にも、なほにほはしきはたとへむ方なく、うつくしげなるを、世の人光る君と聞こゆ」(桐壺①四四)と表現されたことが想起される。

このように人物の形容に用いられた「にほふ」は、主として人物の「盛り」の華麗な容貌を、顔などを中心に表す言葉で、『万葉集』の用例とも照応する面が多いと言えようが、「かをる」の場

合は、次の用例が示すように、「にほふ」のそれとはやや趣を異にしている。

①この春より生ほす御髪、尼のほどにてゆらゆらとめでたく、つらつき、まみのかをれるほどなど言へばさらなり。よそのものに思ひやらむほどの心の闇、推しはかりたまふにいと心苦しければ、うち返しのたまひ明かす。  
(薄雲②四三三)

②この君、いとあてなるに添へて愛敬づき、まみのかをりて、笑がちなるなどをいとあはれと見たまふ。思ひなしにや、なほいとよおぼえたりかし。ただ今ながら、まなこるののどかに、恥づかしきさまもやう離れて、かをりをかしき顔ざまなり。  
(柏木④三二三)

③頭は露草してことさらに色どりたらむ心地して、口つきうつくしうにほに、まみのびらかに恥づかしうかをりたるなどは、なほいとよく思ひ出でらるれど、かれはいとかやうに際離れたるきよりはなかりしものを、いかでかからん、宮にも似たてまつらず、今より氣高くものものしうさまことに見えたまへる氣色などは、わが御鏡の影にも似げなからず見なされたまふ。  
(横笛④三四九)

④なま目とまる心も添ひて見ればにや、まなこるなど、これはいますこし強う才あるさまさりたれど、眼尻のとちめをかしうかをれるけしきなどいとよおぼえたまへり。  
(横笛④三六五)

⑤額つきまみのかをりたる心地して、いとおほどかなるあてさは、ただそれとのみ思ひ出でらるれば、繪はことに目もとどめたまはで、いとあはれなる人の容貌かな、いかでかうもありけるにかあらん、故宮にいとよく似たてまつりたるなめりかし、故姫君は宮の御方ざまに、我は母上に似たてまつりたるとこそは、古人ども言ふなりしか、げに似たる人はいみじきものなりけり、と思しくらぶるに、涙ぐみて見たまふ。  
(東屋⑥七三)

視覚的な表現としての「かをる」の用例の一部であるが、①が明石の姫君、②③④の四例が薫、⑤が浮舟の容貌を表す例で、一瞥して分かるように、「まみ」「まなこる」「眼尻のとちめ」など、眼の表現に集中している。特に薫に関する用例が、柏木の死の直後から、柏木巻、横笛巻などで、引き續き四例も見られること、しかもそれが源氏や夕霧の視線によって、柏木との容貌の類似を語るものであったことには注目すべきであろう<sup>12)</sup>。しかし、どうして薫の目の表現が多く見られるのであろうか。ちなみに、「まみ」の方は『源氏物語』に約三七例見られるが、三田村雅子氏が「まみ」は血の継承の刻印であるとともに、この物語においては、形代のしるし

12) 藤村潔「源氏物語の人物造型―薫―」(『解釋と鑑賞』一九七一・五)p.61



でもあった<sup>13)</sup>」と指摘したように、用例の三分の一がいわゆる瓜二つの容貌(藤壺と桐壺更衣、夕霧・源氏と冷泉院、大君・中君と浮舟など)を語る文脈で繰り返し用いられている。従って、繰り返しその「まみ」が語られることの意味は、三田村氏の論のように理解されるとして、ここでさらに考えてみたいのは、それがどうして「かをる」と形容されているのか、という点である。

「目」について「かをる」と形容する用例は早くから注目されて、赤羽淑氏は「目は精神美内面美の最もよく具現される所」で、その目の表現の中の四例が「薫」の目を形容したものであることから、「かをる」が対象の精神美に中心を置くもので、その他の用例も「かをる」人物の精神美を表していると指摘した<sup>14)</sup>。目が精神美内面美を最もよく具現している所であったかどうかには、多少疑問なしとしないが、それにしても、確に「かをる」には「にほふ」の方よりはるかに精神的なものが含まれていると思われる。というのは、既に考察したように、『源氏物語』以前の用例において、「にほふ」が、色彩感に富み、対象の「今」を「盛り」の一瞬として捉える生命感溢れる表現であるのに對して、後者の方はより精神的な側面を持ち、それと同時に「今」の一瞬に止まらず、むしろ「過去」を響かせる表現であったことが想起されるからである。

しかも『古今集』の「五月待つ花橋の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」(夏・一三九・よみ人知らず)を引くまでもなく、「香」は過去を呼び起こす重要なよすがと言えし、『源氏物語』において、同じく過去を喚起する「橋」にしても、「橋のかをりし袖に」(胡蝶③一八六)などのように、「にほふ」よりは「かをる」の方に非常に密着しているのである。

「かをる」の表現性が、「今」の一瞬に止まらず、むしろ「過去」を喚起する機能を持っていたことを考えると、薫の目が「かをる」と語られる場面で、常に柏木が思い出されていることはむしろ必然であろう。そもそも、男子の誕生と聞いては、柏木に似ている子だったら困ると思っていた光源氏である。②は生後五十日ごろ、③は生えかけた齒で筈をかじる薫の姿を見て、「思ひなしにや、なほいとよおぼえたりかし」(柏木④三二三)「なほいとよく思ひ出でらるれど」(横笛④三四九)と、亡き柏木の面影を見る。薫の出生をめぐって不審を抱いていた夕霧も、薫の目から亡き親友を思い出し、④「いとよくおぼえたまへり」(横笛④三六五)としている。小林茂美氏によると、「似る」があくまで客観的な判断と言えしに對し、「おもふ+自發の「ゆ」」から成る「おぼゆ」は「対象によって”(似ているものが)自然に思われる・連想される”」というのが原意で、多分に見る者の主観で形作られる印象に近いという<sup>15)</sup>。實際、女三の宮に似てないことは③「宮にも似たてまつらず」と語られている。要するに、薫の目の「かをり」は薫の出生の秘密を知らない人々の視線による客観的なものではなく、光源氏や夕霧によって多分に主観的に捉えられているもので、それによって喚起されるのは薫の誕生以前の不幸な「過去」の記憶に他ならない。言い換えれば、まだ幼児である薫が「かをる」という言葉で、引き續き四回も形容

13) 三田村雅子「源氏物語の見る/見られる」(『源氏物語 感覺の論理』有精堂、一九九六) p.92

14) 赤羽淑「源氏物語における呼名の象徴的意義—「光」「匂」「薫」について」(『芸芸研究』一九五八・三)p.30

15) 小林茂美「おぼゆ」(『國文學』一九九一・五) pp.62-63

されたことは、単なる幼児の形容や、いわゆる「精神美」の表現であるより、薫にとっての「過去」すなわち、亡き實父の存在を意識してこそであったと思われる。

薫の例のみならず、⑤の浮舟の例でも「まみのかをり」から、亡き姉の大君が喚起され、「過去」を響かせる表現になっている。ちなみに、物語の中で同じく瓜二つとして登場する藤壺と若紫の場合、「髪ざし、頭つき、御髪のかかりたるさま、限りなきにはほしきなど、ただかの對の姫君に違ふところなし」(賢木②一一〇)のように、「にほふ」によって形容されていた。「過去」を響かせる表現としての「かをる」には、「にほふ」の華やかさとはほど遠い、ある種の暗さが潜んでいるのではなかろうか。

その点は①の明石の姫君の例も例外ではない。もっとも、この例は容貌の類似を語るものではなく、従って「過去」を響かせる表現とも言えないが、明石の姫君が二條院に迎えられた日に、わが子を手放す明石の君を見て、「おろかには思ひがたかりける人の宿世かなと思ほす」(薄雲②四三三)と光源氏がしみじみと考える直後の文章で、全体的にある種の静けさに包まれている。この以前、光源氏は明石の姫君の美質を「うち笑みたる顔の何心なきが、愛敬づきにほひたるを」(松風②四一〇)「もの言ひ笑ひなどして睦れたまふを見るまみに、にほひまさりてうつくし」(松風②四一五)などのように、「にほふ」という言葉で捉えていた。

ちなみに、薫や明石の姫君の他に、幼児の時の冷泉院も「まみのなつかしげににほひたまへるさま、おとなびたまふまみに、ただかの御顔を抜きすべたまへり。御齒のすこし朽ちて、口の内黒みて、笑みたまへるかをりうつくしきは、女にて見たてまつらまほしきよらなり」(賢木②一一六)として、「にほふ」と「かをる」によってその美質が形容されている。冷泉院の場合も「まみ」の表情から實父である光源氏が思い出されるのであるが、薫とは対照的に、「かをる」ではなく「にほふ」によって表現されている。しかし、それと同時に、「口の中黒みて、笑みたまへる」という表情は「かをる」によって表現されている。要するに、華やかな色艶においては「にほふ」によって、乳歯が虫歯になりかけて、モノクロームの暗さを帯びた姿については「かをる」と表現されていて、やはり「かをる」の美質は「にほふ」の華やかさとは異質のものであると思われるのである。

そもそも、人物の容貌を形容する「かをる」は、『源氏物語』において始めて見られるもので、冷泉院と明石の姫君の例は極初期のものであるが、それがいよいよ薫の描寫において方法的に達成されたと思われる。従って、薫の用例は、『源氏物語』以前からの「かをる」のイメージを土台にしながらも、それを遙かに越える新しい表現性を獲得していると言えよう。

以上のように見ると、色彩感に富み、対象の「今」を「盛り」の一瞬として捉える「にほふ」に對して、「かをる」は「今」の一瞬に止まらず、むしろ「過去」を響かせている。しかも『源氏物語』以前の「かをる」に仏教的な意味合いが深く込められていたことを考えてみると、幼児の時「かをりをかき顔ざま」をしていた薫が、後年、仏教に篤い信仰のある青年として改めて造型されることは、おおむね納得のできることであろう。その薫が「今」の自分に満足できず、わが身の出生

に不安を抱き、「過去」に脅かされ、實父の面影を追う懐疑的な青年であるとしたら、まさに「薫る中將」という名称に堪える人物造型と言えるのであろう。

#### IV. おわりに

すると、「匂ふ兵部卿・薫る中將」は、それぞれ「にほふ」人物、「かをる」人物と言えるのであろうか。帝・后に寵愛され、世のもてなしもまばゆいばかりで、それこそ「阿難が光」(紅梅⑤四八)として「今」を生きる匂宮。「何の契りにて、かう安からぬ思ひそひたる身にしもなり出でけん。善巧太子のわか身に問ひけん悟りをも得てしがな」(匂宮⑤二三)と懊惱する薫。いかにも對照的な二人の主人公は、一見するかぎり、まさに「匂ふ兵部卿・薫る中將」と併称するに値する。

改めて兩者の用例について少し触れてみると、匂宮の「にほふ」は、名称に関わる二例を含む八例がその芳香を形容するもので、その他、中將の君や浮舟の視線によって「こまやかにほひ、きよらなることは」(浮舟⑥一三二)のように、容貌を語る「にほふ」が三例見られる。しかし、人工的な工夫をこらし、その芳香のすばらしさが称えられる匂宮を「かをる」と形容した用例は見あたらない。匂宮は徹底的に「にほふ」人物なのである。

一方、薫に関わる「にほふ」も殆んど芳香の意味の例であるが、用例は二三例で匂宮よりも遙かに多く、また、「かをる」の用例においても圧倒的である。「かをる」人物として登場した薫は、實は匂宮以上に「匂ふ」人物なのである<sup>16)</sup>。ここに、ふたりの人物像がそれぞれの言葉のニュアンスをよく体現しているという捉え方ではおさまりに切れない問題が孕まれていると言えよう。言い換えれば、「匂ふ兵部卿・薫る中將」という併称が、作者の計算済の、用意周到な意図に基づくものであると考えるならば、以後の展開における問題も作者の意図と深く関わっていると考えるべきであろう。すなわち、「薫る中將」という名称で物語に据えられた時点で、薫は「過去」を響かせる「かをる」人物として印象的に登場したにもかかわらず、實際の物語の展開においては、匂宮よりも「にほふ」に関わる場合が多く、まさにこの世の「今」を生活している「にほふ」人物として語られているのである。従って、「にほふ」と「かをる」という名称は非常に象徴的なものであると同時に、単なる象徴に止まらぬもう一つの装置として複眼的に捉え直されるべきである。

ちなみに、薫に関わる「にほふ」の用例の中には、異彩を放つ用例が多い。例えば、「宰相中將、その秋中納言になりたまひぬ。いとどにほひまさりたまふ」(椎本⑤一七八)「人となりゆく齡にそへて、官位、世の中にほひも何ともおほえずなん」(椎本⑤一九九)のように、単なる美的な形容ではなく、威光・榮華などの意味で、世人の目に映る繁榮ぶりを表現している。しかも

16) 藤田加代(『「にほふ」と「かをる」』風間書房、一九八〇)p.97

「にほふ」人物としての薫は、「梅の花盛りなるに、にほひ少なげにとりなされじ、すき者ならはむかしと思して」(竹河⑤七〇)のように、意図的に「にほふ」を装うとさへする人物なのである。

周知のように、薫は道心とともに俗物性をも顕著に窺わせる人物として論じられてきたが<sup>17)</sup>、その二重的な人物像を自ずから浮き彫りにさせる一つの装置として、「匂ふ兵部卿・薫る中將」が示唆するところは大きいのであろう。光源氏を喪った「闇」の世界は、「今」と「過去」とが交錯する中で、新しい物語の世界を紡ぎだしていくのである。

## 【参考文献】

- ・赤羽淑(1958.3)「源氏物語における呼名の象徴的意義—「光」「匂」「薫」について」『文芸研究』28号. p.30
- ・伊原昭(1968.12)「にほふ—大伴家持における」『古代文學』第八号. p.19
- ・上野理(1976)「花と香と歌」『後拾遺集前後』笠間書院. pp.39-40
- ・小林茂美(1991.5)「おぼゆ」『國文學』第36卷第6号臨時号. pp.62-63
- ・小西甚一(1969)「源氏物語のイメージリ」日本文學研究資料叢書『源氏物語 I』有精堂. p.218
- ・佐竹昭廣(1980)「古代日本語における色名の性格」『萬葉集抜書』岩波書店. p.99
- ・柴生田稔(1959.3)「かをる」と「にほふ」『國語と國文學』第36卷第3号. p.7
- ・清水好子(1957.2)「薫創造」『文學』25卷-2号. p.219
- ・藤田加代(1980)『「にほふ」と「かをる」』風間書房. pp.41-97
- ・藤村潔(1971.5)「源氏物語の人物造型—薫—」『解釋と鑑賞』第36卷第5号. p.61
- ・三田村雅子(1996)「源氏物語の見る/見られる」『源氏物語 感覚の論理』有精堂. p.92

---

17) 清水好子「薫創造」(『文學』一九五七・二) p.219

## 要 旨

匂宮三帖には、「匂ふ兵部卿・薫る中將」という呼称を含め、薫と匂宮との對照的な設定が隨所に見られる。兩者の芳香の違いをどうして「にはふ」と「かをる」という言葉によって象徴しているのか。上代の用例を検討すると、「にはふ」が色彩感に富み、對象の「今」を、その「盛り」の一瞬として捉える生命感溢れる言葉であったのに對して、「かをる」の方は、色彩のないモノクロームなイメージで、精神的な面が強く、「過去」を響かせる表現になっていることが分かる。このような兩者の對偶性は『源氏物語』の表現とも深く関わっている。特に「かをる」の場合、薫に関する用例が、柏木の死の直後から引き續き四例も見られること、しかもそれが源氏や夕霧の視線によって、柏木との容貌の類似を語るものであったことには注目すべきであろう。要するに、薫の目の「かをり」は、薫にとっての「過去」すなわち、亡き實父の存在を意識してこそ用いられた言葉であって、それによって喚起されるのは、薫の誕生以前の不幸な「過去」の記憶に他ならない。その薫が「今」の自分に満足できず、わが身の出生に不安を抱き、「過去」に脅かされ、實父の面影を追う懷疑的な青年であるとしたら、まさに「薫る中將」という名称に堪える人物造型と言えるのであろう。すると、「匂ふ兵部卿・薫る中將」は、それぞれ「にはふ」人物、「かをる」人物と言えるのであろうか。いかにも對照的な二人の主人公は、一見するかぎり、まさに「匂ふ兵部卿・薫る中將」と併称するに値する。實際に匂宮を「かをる」と形容した用例は見あたらない。匂宮は徹底的に「にはふ」人物なのである。一方、薫に關わる「にはふ」の用例は匂宮よりも遙かに多く、また、「かをる」の用例においても壓倒的である。「かをる」人物として登場した薫は、實は匂宮以上に「匂ふ」人物なのである。ここに、ふたりの人物像がそれぞれの言葉のニュアンスをよく体現しているという捉え方ではおさまりに切れない問題が孕まれていと言えよう。「匂ふ兵部卿・薫る中將」という併称が、作者の計算済の、用意周到な意図に基づくものであると考えるならば、以後の展開における問題も作者の意図と深く関わっていると考えるべきであろう。従って、「にはふ」と「かをる」という名称は非常に象徴的なものであると同時に、單なる象徴に止まらぬもう一つの装置として複眼的に捉え直されるべきである。周知のように、薫は道心とともに俗物性をも顯著に窺わせる人物として論じられてきたが、その二重的な人物像を自ずから浮き彫りにさせる一つの装置として、「匂ふ兵部卿・薫る中將」が示唆するところは大きいのであろう。

キーワード：薫 匂宮 「にはふ」「かをる」 源氏物語 「匂ふ兵部卿・薫る中將」

투 고 : 2005. 5. 31  
1차 심사 : 2005. 6. 11  
2차 심사 : 2005. 7. 2

住 所 : (430-710) 경기도 안양시 만안구 안양동 90-1 삼성래미안 109-1301

電 話 : 031-464-3662/019-375-3662

e-mail : kshfolo417@hanmail.net